

II 平成18年の病害虫の発生状況

1. 病害虫の発生経過概要及び発生原因解析

品種名	病害虫名	発現期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析	防除の概要
早朝水稻	葉いもむし	並	少	・7月3半旬に発生を認めだが、期間を通して少～やや少の発生で推移した。	・前年の発生がやや少ない。かつた。圃内植は多かつた。 が集中した箇所が多かつた。	・トリシクランソール、ブロペナゾール剤等の箱面用による防除
穂いもち		並	少	・8日2半旬に発生を認め、少ない発生であった。	・穂いもちの発生が少なかつた。	・地頭のヒムシラバ付地 がメインフサライ付地による本田防除
綿葉枯病		やや多く	やや多く	・6月4半旬に発生を認めた。7月以降増加してやや多い発生で推移した。発生圃場率は高かつたが、それそれの圃場における発生率は低かつた。	・発生を確認できなかった。	・保育比率(第1世代) はやや高かった。
ヒメビワカ		やや多く	やや多く	・本田では6月上旬に発生を認め7月下旬までやや多く発生で推移した。7月下旬以降は平年並の発生となつた。	・5月以降の高温・本田防除の徹底	・イミダクロリド剤等の箱面用による本田防除 による本田防除 ・エトピプロックス剤、ラフルオニン剤等による本田防除
萎縮病		一	一	・発生を確認できなかった。	・ツマグロヨコハの発生が少く保育率は低かつた。	・エトエンプロックス剤、シラブロオニン等による本田防除 ・別府ヤシルガ守株、ジンジン、ウツバキ加農による本田防除
ツマグロヨコハ		並	やや少	・本田では6月上旬に発生を認めた。期間を通じて少～やや少発生で推移した。	・トビイロウシカの多発生に伴い本田防除が徹底された。	・エトエンプロックス剤、シラブロオニン等による本田防除 ・別府ヤシルガ守株、ジンジン、ウツバキ加農による本田防除
紋枯病		やや多く	やや多く	・6月6半旬に発生を認めた。平年並の発生であったが、7月下旬以降は平年よりやや少ない発生となつた。	・移動後の気温が低く生糞がやや悪かつた。	・トリフルミゾール剤、ペフラゾソーリー剤による本田防除
ばか苗病		並	やや少	・ほとんど発生を認めなかつた。	・種子引苗の徹底	・フェリムゾン・フサライト剤、カスガマイシン・サライド剤による本田防除
二葉茎枯病		並	やや多く	・7月5半旬に発生を認め、平年並の発生とあつたが、その後増加しやや多い発生となつた。	・8月の高温	・フェリムゾン・フサライト剤、カスガマイシン・サライド剤等による本田防除
セジロウカ		並	やや多く	・5月3半旬に初飛来、6月3半旬までにわずかに飛来を認めた。その後、6月6半旬～7月1半旬、7月4～5半旬に多飛来が認められた。7月は細かい発生となつた。8月以降は減少し平年より少ない発生となつた。	・飛来量が多かつた、本田防除の徹底	・BPMC剤、エトフェンプロックス剤、シラブルオフェン剤等による本田防除
ヒロウカ		並	やや多く	・5月3半旬に初飛来を認めた。その後、6月6半旬～7月1半旬、7月4～5半旬に多飛来が認められた。その後、6月では6月6半旬に発生を認め、その後やや多い発生で推移した。	・飛来量が多かつた。	・カカルタツフ剤等による本田防除
コフノメイガ		並	やや少	・5月1半旬に初飛来を認めた。その後、やや少～並の発生で推移した。	・出発期までの飛来量がやや少なかつた。	・ペンカラカルブ剤、ミダクロフルオフェン剤等による本田防除
稻毛ぐわん		並	やや少	・5月上旬に発生を認め、少発生であった。その後やや増加し、やや少ない発生となつた。	・4月下旬の低温・前年の発生がやや少なかつた。	・多飛来地ではシクロプロトン剤による本田防除
イキナウムシ		並	やや多く	・5月上旬に発生を認め、やや多い発生で推移した。	・出発期までの飛来量が多かつた。	・ペンカラカルブ剤、イミダクロブリジン剤による本田防除
イセヒカゲムシ		並	やや多く	・6月5半旬に発生を認め、並～やや多い発生で推移したが、8月以降は平年並の発生となつた。	・近年増加傾向にあり、前年の越冬量が多かつたと考えられる。	・出発期以前のエトフェンブロクリス、シラフルガフェン・MPP剤等による本田防除
仔モルヒゼ		やや多く	やや多	・6月5半旬に発生を認め、7月上旬にやや増加したが、その後減少しやや少ない発生となつた。		・カカルタツフ剤等による本田防除
フタヒュウガ		並	やや多	・5月6半旬に発生を認め、やや多い発生で推移した。	・前年の発生が多く、越冬量が多かつたと考えられる。	・カカルタツフ剤等による本田防除
斑点糞カ メムシ類		並	やや多	・6月～7月までの雑草地における調査では平年並であったが8月以降増加し、やや多い発生となつた。	・8月以降の高温	・出発期以前のエトフェン・MPP剤等による本田防除

作物名	病害虫名	性状	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析	防除の概要
高粱	葉面黒化	斑	少	・7月5半旬に発生を認めた。その後やや増加したが、期間を通して少ない発生で推移した。	・前年発生が少なかった。 ・8月の蒸温、7月中旬、8月上旬の少雨の結果による防除	・トリックラソール剤、プロペナゾール剤等
穀いも	やや虫	少	・9月3半旬に発生を認めた。その後の進展はほとんどなく少発生となつた。	・無いものの発生が少なかつた。	・9月上旬の少雨が防除された。	・出芽期のエリムソングサナード剤、かがマインツガライド剤等による本田防除
高粱枯病	並	並	・7月2半旬に発生を認め、8月上旬にやや増加したが平年並の発生で推移した。	・ほとんどの発生を認めなかつた。	・ヒメビランガ(第1世代) の侵襲がやや高かつた。 ・ヒメビランガの発生がや少なかつた。	・ヒメビランガの第2世代 の侵襲がや高かつた。 ・トビイロウンガの多発生に伴い本田防除が徹底された。
ヒメビランガ	少	やや少	・本年では6月2半旬に発生を認め、平年並の発生で推移した。8月下旬以降は減少し、やや少ない発生となつた。	・8月下旬～9月上旬に平年並の発生となつた以外は期間を通じやや少ない発生である。	・スマグロコバイヤの発生が少く侵襲も低かった。 ・トビイロウンガの多発生に伴い本田防除が徹底された。	・イミダクロブリジ、フブロニル等の防除剤による防除による本田防除
アザミ枯病	並	少	・8月下旬～9月上旬に平年並の発生となつた。	・ほとんどの発生を認めなかつた。	・少く侵襲も低かった。 ・トビイロウンガの多発生が少く侵襲も低かった。 ・トビイロウンガの多発生に伴い本田防除が徹底された。	・イミダクロブリジ、フブロニル等の防除剤による防除による本田防除
穀枯病	並	やや少	・7月5半旬に発生を認めた。その後やや増加したが、期間を通して少ない発生で推移した。一部圃場では多発生した。	・8月上旬に平年並の発生となつた。	・他の初期生育が不良であった。	・イミダクロブリジ、フブロニル等の防除剤による防除による本田防除
ばか苗病	遅	並	・7月5半旬に発生を認め、平年並の発生で推移した。	・7月5半旬に発生を認め、平年並の発生で推移した。	・種子消毒の徹底	・トリフルミゾール剤、ペフラシエートによる種子消毒
ごま葉枯病	並	並	・7月5半旬に発生を認め、平年並の発生で推移した。	・6月3半旬に初発、6月3半旬にわざかに発生を認めた。その後、6月6半旬～7月1半旬、7月4～5半旬に多発が認められた。本田での発生は特に葉ではやや多い発生であったが、7月は物加し多発生となつた。8月は一日減少傾向となつたが9月以降増加した。	・飛沫量が多かった。 ・本田防除の徹底	・カスガマイシン・フサラード剤等による本田防除
セジロウカ	並	多	・6月3半旬に初発、6月3半旬にわざかに発生を認めた。その後、6月6半旬～7月1半旬、7月4～5半旬に多発が認められた。8月6半旬にも発生が認められた。本田での発生は特に葉ではやや多い発生であったが、7月は物加し多発生となつた。8月は一日減少傾向となつたが9月以降増加した。	・8月6半旬の飛沫	・イミダクロブリジ、フブロニル等の防除剤による防除	・トリフルミゾール剤、ペフラシエートによる種子消毒
ヒメウカバ	並	多	・6月上旬～5半旬に多発が認められた。8月6半旬には非常に多い飛沫が認められた。本田では6月6半旬に発生を認め、その後多い飛沫で推移した。8月以降平年並の発生となつたが、9月には増加、多発生となつた。	・飛沫量が多かった。 ・7月下旬～8月中旬にかけての防除が徹底された。	・飛沫量が多かった。 ・8月6半旬の多飛沫	・トリフルミゾール剤、エトフェンプロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
コソノメガ	並	並	・6月5～7月2半旬に断続的にやや少ない飛沫があつた。その後7月4～6半旬に多飛沫が認められた。本田での発生は7月上旬までやや少ないが、その後増加し平年並の発生となつた。一部地域では多発の圃場も認められた。	・飛沫量がやや少く、並であった。	・トビプロニル剤、スピノサド剤の防除剤による防除	・イミダクロブリジ、カイロ・テフエンジド剤、カルクシップ剤、エトキシフェンジド剤等による本田防除
伏毛ウカバ	並	やや少	・草植え地城で6月3半旬に発生を認めたが、やや少ない発生であった。	・前年の発生がやや少なかった。	・ベニカラガバ剤、イミダクロブリジの防除による防除	・ベニカラガバ剤、イミダクロブリジによる本田防除
イネウムシ	並	並	・早晩え地城で6月3半旬に発生を認めたが、全体的に较少年並の発生であった。	・近年増加傾向にあり、前年の越冬量が多かったと考えられる。	・多飛沫ではシクロプロリン剤による本田防除	・トリフルミゾール剤による本田防除
イネウムシ	並	多	・7月2半旬に発生を認め、平年並の発生であつたが、7月以後、やや減少しやや多い発生となつた。8月以降、やや少ない発生であった。その後、やや増加し平年並の発生となつた。	・近年増加傾向にあり、前年の越冬量が多かったと考えられる。	・出芽期以降のエトフェンプロックス、シラフルオフェン、MPPA等による裏込渠力メムジとの同時防除	・エトフェンジド剤、カルクタブ剤、メキシフェンジド剤による本田防除
伏毛ウムシ	並	並				

品目	病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解釈	防除の概要	
タガヤガ メムシ	フタオビコ ヤガ	やや多	多	・地草地での発生は8月上旬 まで平年並であった。 ・本田では8月下旬の出穗期頃に 多発生とったが、9月以降は 減少し、平年並の発生となつた。	・6月5半旬には発生を認めた。 7月上旬までは平年並であつたが、7月下旬以降増加し多 い発生となつた。	・前年の発生が多く、越冬量 が多かったと考えられる。	
現点実力 スクリーン ゴガイ	並	やや多	多	・地草地での発生は8月上旬 まで平年並であった。	・8月の高温 ・防除の効性	・バイロニール剤、スピノサ ド剤の粒散布による防除 ・テラフェノゾド剤、カルタ ツブ剤、メキシフェノジド 剤等による本田防除	
さび病類	大麦:一 小麦:混 裸麦:一	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・火薬:播種では発生を認めることがで きなかった。小麦では5月下旬にあさび 病の発生を認めたが少ないとされた。	・火薬:播種では発生を認めることがで きなかった。小麦では5月下旬にあさび 病の発生を認めたが少ないとされた。
赤かび病	大麦:並 小麦:並 裸麦:並	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・3度ともこの6月半旬に赤かび病を認め た。平年の発生時期であつたが、少な い発生があつた。その後やや増加した が、平年より少ない発生となつた。	・出穂期花期の4月上旬に 降雨が多かつたものの、9月 中下旬は气温が低く、降水 量も平年並である。
うどんこ病	大麦:一 小麦:混 裸麦:一	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦:播種では発生を認めたが、少ないとされた。 ・大麦:播種では発生を認めたが、少ないとされた。その後やや増加した が、平年より少ない発生となつた。	・播種後降雨による育 成環境による育成 の遅れ、その後の月中旬にかけ て低温、寒風に見舞われたため、表 の生育がやや不良であった。
黒穂病	大麦:早 小麦:早 裸麦:早	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦では発生を認めたが、少ないとされた。 ・大麦:播種は平年並に発生を 認めた。裸麦は2月中旬に発生を 認めたが、その後の3月半旬に 少ない発生で世移した。	・播種量が多かつた。
銅色網病	大麦:混 小麦:混 裸麦:混	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦では発生を認めたが、少ないとされた。 ・大麦:播種はやや多かつた。 ・3度とも4月上旬に発生を認め、 少ない発生であった。その後大麦、 裸麦は平年並の発生となつた。小 麦では少ない発生で世移した。	・前年の発生がやや多く、伝 播種量が多かつた。
アブラムシ 類	大麦:混 小麦:混 裸麦:混	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・大麦では発生を認めたが、少ないとされた。 ・大麦:播種はやや少ないとされた。 ・3度とも4月上旬に発生を認め、 少ない発生であった。その後大麦、 裸麦は平年並の発生となつた。小 麦では少ない発生で世移した。	・播種量により近年減少 傾向にある。
モザイク病	耕作:混 操作:並	耕作:少 操作:並	少	・耕作:4月下旬から発生し、 やや多い発生であった。	・耕作:4月下旬から発生し、 やや多い発生であった。	・圃地の更新 ・アブラムシの防除	
モザイク病	耕作:並 操作:並	耕作:少 操作:少	少	・耕作:操作:並	・耕作:操作:並	・圃地の更新 ・アブラムシの防除	
疫病	耕作:混 操作:並	耕作:少 操作:少	少	・耕作:初発生は4月下旬に 確認したが、その後の延展 はほとんど見られなかつた。	・4月中旬～下旬の低温 ・10月～11月上旬の少雨	・アブラムシ、マツヌ、フェル マイ、糞、TPN剤等によ る防除	
若枯病	耕作:混 操作:少	耕作:少 操作:少	少	・耕作:初発生は10月上旬 に確認したが、その後の延展 はなくほとんど見られなかつ た。	・4月中旬～下旬の低温	・クロロビケン-D-D 剤等に よる土壤消毒	
アブラムシ類	各作:混 耕作:少	各作:少 耕作:少	少	・各作:4月上旬から発生し、 少ない発生であった。	・3月中旬～下旬の低温	・ミダクロウリト、合成ビレス ロゲン系剤等による防除	
ニジェウヤホシ デンク	各作:並 耕作:並	各作:並 操作:並	少	・秋作:10月下旬から発生 し、やや少ない発生であった。		・アブラムシ類との同時防 除	
ジャガイモ ガ	耕作:並 操作:並	各作:並 操作:並	少	・春作:4月下旬から発生し、 秋作:10月下旬に発生を確 認し、半年並の発生となつた。		・アブラムシ類との同時防 除	

監視する	病害虫名	発生月	発生量	発生過程の概要	発生原因の解説	防除の概要
大豆	真葉性病害 (ハエムシ、 卵形アザミ、 オオムカヒ)	若作物 操作:並 操作:並	並	-春作5月上旬から発生し、 平年並の発生であった。 -秋作5月下旬から発生し、 平年並みの発生であった。		-アフラムシ類との同時防 除 -右櫻ソリ系剤等による 防除
ベビ病	やや遅	並		-9月2~平旬に発生を認め、 平年並の発生であった。		
葉病害	並	やや多		-8月6~平旬に発生を認め、 平年よりやや多い発生であった。	-9月中旬の台風	
ハスモントウ	並	やや多		-8月1~平旬から発生を認め、 9月上旬まで増加傾向であつたが、9月中旬の台風後は平 年よりやや少ない発生であった。		-テフフェノゾジド剤、エンド エンブロックス剤、インド キサカルブ剤による防 除
黒頭目幼虫	並	並		-8月2~平旬にウツバ類の発生を 認め、平年並の発生であった。		-ハスモントウとの同 時防除
吸実性力ムシ	並	やや少		-8月5~平旬に発生を認め、平年 よりやや少ない発生を推察した。		-エトフェンプロックス剤 による同時防除
かんせつ	そうか病	葉:並 果実:並	葉:並 果実:並	-5月上旬に春葉における発 生を認め、発生量はほぼ平 年並で推移した。 -6月上旬に果実における発 生を認め、発生量は平年並で 推移した。	-4月上旬の多雨 -初期防除が徹底された。 -6月下旬に果実における発 生を認め、発生量は平年並で 推移した。	-イヘンガナム剤、ジオノ 剤等による芽芽期の防除 -フルアフランム剤、クリキシム メチル剤による灰色かび 病との同時防除 -4月上旬の多雨による 葉面追加散布
かいよう病	葉:中止 果実:並	葉:やや多 果実:並		-5月下旬に春葉における発 生を認めめた。その後、発生場 所は平年よりやや多かったも のの発病率本は平年並であ った。ただし、10月に夏秋相 互生がやや目立った。 -6月下旬に果実における発 生を認め、発生量は平年並で あった。	-越冬病斑が多くかった。 -初期防除が徹底された。 -9月中旬の台風	-銅剤、ストレptomycin剤に による防除
黒点病	並	並		-7月上旬から発生が認めら れた。その後の発生は平年 並で推移した。	-4月上旬~8月下旬に随時 が多かつたが、途中に好天 の期間が十分あり、通常 防除が可能であった。	-マツセワ剤、マンネン剤に による防除
斑点かび病	並	並		-11月に平年島州の取扱物を認定し たところ平年並の被害認められた。 -春先から7月までは少発生 であった。8月は平年並の発 生となつたが、9月上旬には 急激に発生が少なくなった。	-防除の撤除 -越冬虫が少なかつた。 -4月上旬~5月上旬~中旬、6 月下旬の多雨 -8月上旬~下旬の強雨 -9月中旬の台風	-フルアフランム剤、クリキシム メチルによる灰色かび病との同時防除 -冬季及び夏季のミシン 油乳剤による防除 -8月下旬~9月のエト サゾール剤、スピロジロフエン 剤、ヒコセペート剤等によ る防除
かみかげ	並	少		*巡回調査では発生を認め ず、少ない発生であった。	-5月上~中旬、6月下旬、7 月下旬、8月中旬~下旬の多 雨が発症された。	-ピリヘン剤、酸化ヒ素 及ぶ剤による防除 -イギリオラン剤、PAP剤 によるかいからムシ類との 同時防除
カラマツガヒトリ	並	やや多		-H17年10月にアカメガシワ やカラマツセンジョウで幼虫異 が近年では最も多く認められ た。 -4月にかんせつ病で発生が 認められ、一部多発したが、 防除の徹底により被害は少 なかつた。 -本年10月下旬の調査で幼 虫の発生が多かつた。	-平成14年の秋以降、増加 傾向にある。	-秋期に幼虫虫を除去 -有機リン剤による防除

病害虫名	発生時期	発生日	発生過程の概要	発生原因の解説	防除の概要	
アヤノキイロバ リミナ	並	並	・トラップの設置量は平年よりやや少なく推移したが被雷果はほぼ平年並であった。	・5月上～中旬、6月下旬、7月下旬、8月中～下旬の多雨	・オオニコナイト系剤、アセトート剤、マンゼブ剤、合成ビレスロド系剤による防除	
カブシ類	並	明るい時 多 暗い時 少	・チャバネアガルムシの越冬量は平年よりも多かった。スリットラップ(諫早市、多良見町、右明町)及び守衛灯(西彼杵町)への飛来は7月1半旬から増加し、8月2半旬までが多い状態が続いたが、その後飛来量は急速に減少した。果实の落丁被害が見られた。	・越冬量が多かった。 ・ヒノキをねう果量は平年並 ・7月下旬、8月中～下旬の強雨	・光反射シートによる防除 ・合成ビレスロド系剤、キオニコナイト系剤による防除	
アカバナラム シ類	遅	少	・果实での発生は、9月上旬からみられ、平年より少なかつた。	・幼虫期の多雨(5月上～中旬、7月下旬)	・冬季及び春季のマシン油乳剤による防除 ・6月上旬～下旬のPAP剤DMTP剤等による防除	
ひわ	がんしゅ 病	並	多	・6月上旬に春葉における発生を認めた。7月上旬以降の夏葉での発生は多かつた。	・6月下旬の強風雨、7月下旬、8月中旬～下旬の多雨	・芽かき、剪定後の樹木和剤による防除
灰斑病	並	葉:やや多 果実:並	・5月上旬に春葉における発生を認め、春葉～夏葉における発生は平年よりやや多かつた。 ・昨年の葉での発生は平年並で、収穫期前(5月上～中旬)に雨が多かつたが、腐敗果の発生は平年並であつた。	・4月上旬、5月上～中旬、6月下旬、7月下旬、8月中旬～下旬の多雨 ・昨年、開花期の防除が徹底された。	・春葉及び夏葉伸長促進剤による防除 ・開花期のイミノクサンカルペン酸塩剤による防除	
ナシムシ類	並	やや少	・フェロモントラップ(諫早市)における誘致量は7月から8月にかけて多かつたが、8月中旬以後は平年並の発生であつた。被害は平年よりやや少なく推移した。	・4月上旬、5月上～中旬、6月下旬、7月下旬、8月中旬～下旬の多雨	・カルタフ剤による防除	
なし	黒豆病	やや弱	多	・葉、果実ともに平年よりやや早い4月下旬に初発を確認した。その後黒豆病が増加し平年より発生が多かつた。	・越冬量が多かつた。	・袋かけの実施
赤豆病	並	やや少	・初発は4月下旬で平年並であった。その後の発生は平年並だった。	・5月上中旬の多雨	・日向利等による防除	
うどんこ病	やや強	並	・8月上旬に初発を確認した。その後の発生は平年並だった。	・発芽期から幼葉期の防除の徹底	・黒豆病との同時防除	
ナシムシ類	並	並	・フェロモントラップ(諫早市)における誘致量は7月から8月にかけて多かつたが、8月中旬以後は平年並の発生であつた。	・8月中下旬の多雨	・合成ビレスロド系剤、有機ソ系剤による防除	
ハダニ類	やや強	少	・8月上旬に発生を確認した。発生量は平年より少なかつた。	・5月上中旬の多雨 ・6月下旬、7月下旬の多雨	・ミルベメチジン剤、エキゲンール剤等による防除	

品目	病害名	発生月	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析	防除の概要
カメムシ類	アフラムシ	並	多	・アハナガムシの越冬量は半年よりも多かった。ソロモンテラブ(謙信市、多良見町、右明町)及び千原町(西彼町)への飛来は7月上旬から増加し、8月と半旬までは多い状態が続いたが、その後飛来量は急速に減少した。“飛来の圃場で供葉の吸汁者が見られた。” ・5月下旬に発生を確認した。その後の発生は平年よりやや少なかった。 ・初発は4月下旬で平年並であった。4月下旬から5月下旬にかけて平年より発生がやや多く、6月以降はほぼ平年並だった。	・越冬量が多かった。 ・5月上旬の多雨 ・6月下旬、7月下旬の多雨	・有機リソ系剤、ルーバンタ系剤、キオコノバイト系剤等による防除
アビレムシ	やや遅	やや少				
アビレムシ	並	やや多				
アビレムシ	遅	並		・初発は7月上旬で平年より遅かった。7月の発生量は平年よりやや多かった。8月以後発生は減少したが、9月になり発生が増加した。 ・初発は7月上旬でその後の発生は平年並だった。	・5月上旬の多雨 ・8月下旬の多雨	・マンセフ剤、ホセモル剤、アカミツ系剤等による防除 ・シテナン剤、マンセフ剤等による防除
アビレムシ	並	やや多				
アビレムシ	並	やや多		・黄色粘着板トラップ(謙平市)による誘致量は平年より少なかつたが、果房での被害は5月下旬から見られ、平年よりやや多かった。 ・5月下旬から発生が認められた。平年よりやや少ない発生であったが、9月以降発生が増加した。	・防蚊の徹底	・モリ剤等による防除
アビレムシ	やや遅	並				
アビレムシ	並	やや少		・エロモドトラップ(東彼杵町)による誘致量は平年並であった。 ・卵の圃場で二倍率摘採後に巻葉被害が発生した。	・8月下旬の多雨	・モリ剤等による防除
アビレムシ	並	並		・エロモドトラップ(東彼杵町)による誘致量は平年並であつた。 ・卵の圃場で二倍率摘採後には巻葉被害が発生した。		
アビレムシ	やや遅	並				
アビレムシ	並	やや少		・4月下旬以降は平年並の発生となった。9月以降発生がやや増加した。 ・5月から6月にかけて発生が増加したが、その後減少し、平年よりやや少ない発生となった。		・キニコバ系剤等による防除
アビレムシ	並	並				
アビレムシ	並	少		・4月上旬から発生が認められた。8月上旬ではほとんど見られなかったが、8月下旬から発生が増加した。	・5月上旬の多雨 ・6月下旬、7月下旬の多雨	・キニコバ系剤等による防除
アビレムシ	やや遅	やや少		・第1、第2世代ともに発生が前年より遅間稚度遅く、発生も前年より少なかった。 ・ほとんど発生しなかつた。	・ふ、北嶺期前後の多雨	・有機ジスル、IGR剤等による防除
アビレムシ	並	並				・アフラムシ類の防除
冬季アビレムシ	並	並				

監視地名	病害虫名	発生時期	発生量	発生初期の概要	発生原因の解釈	防除の概要
苗病	苗病虫名	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		
黒かび病	黒かび病	並	少	・5月上旬から発生し、少ないと発生であった。	・性成性品種の普及	・トリフルミート、チオアカートメチル、TPN剤等による防除
灰色かび病	灰色かび病	薄	やや少	・3月上旬から発生し、やや少ないと発生であった。		・湿度管理
アグリムシ類	アグリムシ類	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・アグリムシ類との同時防除
マダハモクリ	マダハモクリ	並	少	・11月上旬から発生し、年内は半年並で推移したが、年明け後は少ない発生であった。	・12月上旬～下旬の低温	・エマクタ・安息香酸塩、スピノリ・シロツク・オニコノトケノト系剤等による防除
コナラヌカ類	コナラヌカ類	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。	・12月上旬～下旬の低温	・スピノリ・IGR、BT剤等による防除
クバコガ類	クバコガ類	並	やや少	・11月上旬から発生し、期間を通して半年並の発生であった。		・防虫網の設置
モリイケ病	モリイケ病	並	並	・2月に発生を認め、半年並の発生であった。		・定植時のネオニコタノイト系剤等による防除
斑点腐病	斑点腐病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・トフランロウクス、ビーリダベントラ・ロフラン、アセミブリト剤等による防除
ベニ病	ベニ病	やや遅	やや少	・11月下旬から発生し、期間を通してやや少ないと発生であった。		・アフランジ類の防除
相思病	相思病	並	並	・11月上旬から発生し、期間を通して半年並の発生であった。		・銅剤による防除
うどんこ病	うどんこ病	並	やや多	・11月上旬から発生し、2月までほぼ半年並で推移したが、3月にかけてやや多い発生となつた。	・2月中～3月上旬の高温	・湿度管理
灰色かび病	灰色かび病	薄	少	・3月下旬に発生を認め、少ない発生であった。		・ヤンゼグ、ホセギル、フェニアル系剤による防除
菌核病	菌核病	薄	少	・3月下旬に発生を認め、少ないと発生하였다。		・ジエフエンカル・ドライカーボンテル、シトロピカル・アロフラン等による防除
アグリムシ類	アグリムシ類	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・EBI・トキシアクリレート系、TPN、炭酸水素カリウム、パニヒリム剤等による防除
ミニミキヨウアリミツ	ミニミキヨウアリミツ	並	並	・11月下旬から発生し、半年並の発生であった。		・被害果の除去
コナラヌカ類	コナラヌカ類	並	並	・11月上旬から発生し、半年並の発生であった。		・シオフエンカルブ、フロント・ス・メハニ・ヒリム、フルシ・オキニル剤等による防除

品目	病害虫名	発生月	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析	防除の概要	
(5件目)	モサイク病	並	並	・ほんとんど発生しなかった。	・アフタムゾ類の防除	-アフタムゾ類の防除	
	軟腐病	やや混	並	・12月に発生を認めた。	・銅、オキソリニウム類剤による防除	-銅、オキソリニウム類剤による防除	
	白斑病	並	やや少	・ほんとんど発生しなかった。	・IPN、キャブラン剤による防除	-IPN、キャブラン剤による防除	
	ベビ病	やや深	並	・11月下旬に発生を認めた。	・白斑病との同時防除	-白斑病との同時防除	
	黒斑病	並	並	・ほんとんど発生しなかった。	・コナガとの同時防除	-コナガとの同時防除	
	アブラムシ類	やや深	並	・11月上旬から発生し半年 後の発生であった。	・コナガとの同時防除	-コナガとの同時防除	
(5件目)	コナガ	並	やや少	・ほんとんど発生しなかった。	・IGR、BT、カルタブ、アセトート、スマクチン安息香酸塩、スピリバゲート剤等による防除	-IGR、BT、カルタブ、アセトート、スマクチン安息香酸塩、スピリバゲート剤等による防除	
	モジロホウ	並	並	・ほんとんど発生しなかった。	・コナガとの同時防除	-コナガとの同時防除	
	ハヌモホウ	並	やや少	・ほんとんど発生しなかった。	・コナガとの同時防除	-コナガとの同時防除	
	黒腐病	並	やや少	・ほんとんど発生しなかった。	・銅、オキソリニウム類剤による防除	-銅、オキソリニウム類剤による防除	
	青枯病	並	やや少	・ほんとんど発生しなかった。	・抗生物質の除去 ・プロドクタ・イワヨノイ剤等による防除	-抗生物質の除去 ・プロドクタ・イワヨノイ剤等による防除	
	アブラムシ類	やや深	やや多	・9月上旬から発生し、半年 よりやや多い発生であった。	・9月中旬～10月下旬の少 量 ・9月上旬～11月上旬の高 量	-コナガとの同時防除	-コナガとの同時防除
(5件目)	コナガ	並	並	・9月下旬から発生し、半年 後の発生であった。	・IGR、BT、カルタブ、アセトート、スマクチン安息香酸塩、スピリバゲート剤等による防除	-IGR、BT、カルタブ、アセトート、スマクチン安息香酸塩、スピリバゲート剤等による防除	
	ヨウムシ類	やや混	並	・10月下旬から発生し、半年 後の発生であった。	・コナガとの同時防除	-コナガとの同時防除	
	モンゴロウ	並	並	・10月上旬から発生し、半年 後の発生であった。	・TPN、マンセフ、スアミド系剤による防除 ・TPN、マンセフ、酸アミド系剤による防除	-TPN、マンセフ、スアミド系剤による防除 -TPN、マンセフ、酸アミド系剤による防除	
	タマネギ (5件目)	白	やや少	・ほんとんど発生しなかった。	・コナガとの同時防除	-コナガとの同時防除	
	ベビ病	並	多	・3月下旬から発生し、多い 発生であった。	・ベビ病との同時防除	-ベビ病との同時防除	
	ホトリチヌ風 菌による 葉枯症	混	少	・4月下旬に発生を認めた。	・ベビ病との同時防除	-ベビ病との同時防除	
(5件目)	セウ病	並	並	・3月下旬に発生を認めた。	・アザミヒマ類との同時防除	-アザミヒマ類との同時防除	
	キアサミカ マ	やや深	やや少	・11月上旬から発生しやや 少ない発生であった。	・アセトート剤等による防除	-アセトート剤等による防除	
	アラムシ類	遅	やや少	・3月下旬に発生を認めた。	・除 ・イモクダシ・アルペシ・酸塩 剤による防除	-除 -イモクダシ・アルペシ・酸塩 剤による防除	
	うどんこ病	早	多	・10月上旬から発生し、多い 発生であった。	・BT、DDVP、PAP剤 等による防除	-BT、DDVP、PAP剤 等による防除	
	ヨウガ	並	やや少	・9月下旬に発生を認めた。	・メリシル・ヘルペルジル剤等による防除	-メリシル・ヘルペルジル剤等による防除	
	キリシ	やや深	並	・10月下旬に発生を認めた。	・銅、オキソリニウム類剤によ る防除	-銅、オキソリニウム類剤によ る防除	
(5件目)	セイガス 病	斑点細菌	並	やや多	・11月下旬から発生し、やや 多い発生であった。	・9月上旬～11月上旬の高 量	-銅、オキソリニウム類剤によ る防除
	腐敗病	並	やや少	・ほんとんど発生しなかった。	・銅、オキソリニウム類剤によ る防除	-銅、オキソリニウム類剤によ る防除	
	灰色かび 病	やや深	並	・10月下旬から発生し、半年 前の発生であった。	・オフカネットオール、イワヨシ オノ剤による防除	-オフカネットオール、イワヨシ オノ剤による防除	
	青枯病	やや平	並	・10月下旬から発生し、半年 後の発生であった。	・オフカネットオール、イワヨシ オノ剤による防除	-オフカネットオール、イワヨシ オノ剤による防除	

品種名	病害虫名	発生月	発生日	発生過程の概要	発生原因の解析	防除の概要
ハスモドウ	アブラムシ類	並	並	・9月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・アセトフェート、ペルメトリル剤、エマノクチソ安息香酸塩剤等による防除
アブラムシ類	やや混	並	・10月下旬から発生し、平年並の発生であった。			無症状群の定植
イチゴ (本園05 年植付)	斑枯病	並	多	・青苗期は少発生で推移したが、定植後の9月下旬から発生し、12月まで発生が続いた。	・9月上旬の台風、9月上旬～11月上旬の高溫、本病に対する感受性の高い品種の普及	・免病株の除去、高設青苗、雨除け青苗、アソキシストロピング剤等による防除
茎葉病	やや混	やや多	・11月下旬から発生し、平年よりや多い発生であった。	・9月上旬～11月上旬の高溫	・無症状群の定植	
うどんこ病	並	少	・葉で10月下旬から発生し、果实で1月から発生し、少ないと。	・本病に対する感受性の高い品種の普及	・免病株の除去、土壌消毒	
灰色かび病	混	やや少	・3月下旬から発生し、それは少ない発生であったが、その後は平年並の発生であった。		・古葉、罹病葉の除去、被害葉の除去	
アブラムシ類	並	やや少	・9月下旬から発生し、2月まで平年並の発生であったが、その後は少ない発生であった。	・9月下旬から発生し、9月下旬と1月に一時的に増加したが、期間を離して平年並の発生であった。	・温度管理	
ハリニョウ	並	並	・9月下旬から発生し、9月下旬と1月に一時的に増加したが、期間を離して平年並の発生であった。	・9月下旬から発生し、平年並の発生であった。	・被害葉の除去、イワシオシビンガラジン、アセトフェート、ガービング、メトキシアカルート系剤等による防除	
ハスピクトウ	並	並	・9月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・フルハリネット、ヒリゲヘン、DDVP、アセタミトリル剤等による防除	
イチゴ (苗砧圃 05年植)	斑枯病	並	多	・ <i>Collotrichum acutatum</i> による斑枯病は7月上旬から発生し、平年並の発生であった。 <i>Glorennula cingulata</i> による斑枯病は7月上旬から発生し、7月下旬から急増し、多い発生であった。	・ヒュエトセート、エトキナリル、ミルバメチラン、テフエンヒドリ剤等による防除	
茎葉病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・美敵による防除	
うどんこ病	並	やや少	・5月上旬から発生し、やや少ないと発生であった。	・5月上旬～8月下旬の高溫	・IGR剤、エマノクチソ安息香酸塩、スピノリ、ヒリゲ	
輪斑病	やや早	多	・5月下旬から発生し、期間をとおして多い発生であった。	・施肥の少量化	・薬剤等による防除	
アブラムシ類	並	少	・5月上旬から発生し、少ない発生であった。	・本病に対する感受性が高い品種の普及	・免病株の除去	
ハリニョウ	やや混	並	・5月上旬から発生し、平年並の発生であった。		・全面マルチ放置	
ハスピクトウ	並	少	・5月上旬から発生し、平年並の発生であった。	・本病に対する感受性が高い品種の普及	・圃地の土壤消毒	
					・銅、マンゼブ、アソキシストロピング等による防除	
					・免病株の除去	
					・土壤消毒	
					・古葉の除去	
					・被害葉の除去	
					・DBI剤、液肥水素カリム、ボリオキシン、バニビリム、マシン油剤等による防除	
					・ビニルタブノール剤による防除	
					・被害葉の除去	
					・ヒリゲン、アセタミトリル剤等による防除	
					・ヒュエトセート、エトキナリル、ミルバメチラン、クロルヒドリル剤等による防除	
					・IGR剤、エマノクチソ安息香酸塩、スピノリ、ヒリゲンモントラップによる防除	
					・フェロモントラップによる発生予報	